

妙観

しづや りふかふ

「めうくわんがかたなはいたくたらず」

『徒然草』の第三九段だ。

秋らしい乾いた風が、さらさらと明晰な日だった。

どこか懐かしくて、寂しい。それは日本の風土が日本に住む人に染め附けた日本人の基調をなす心情なのかもしれない。

古刹の丸柱や欄干の、塗りが落ちて、木の素地が露わになって、乾いて鬆のようになり、ひび割れたりしている風合いを、撫でるように眼で愛でていたとき、ふと、それが想い泛んできた。

茶屋に休んで茶を所望し、つなぎの少ない蕎麦を啜って、仄かに芳しく覚えるその香りを、古式ゆかしく観ずとき、復たその感覚が甦った。

強いて惟れに説明は附けまい。

風土が自然に与えたもうたものに、角々しい「log」など、無用であろう。理は「ひふみよいむなや（一二三四五六七八）にしかず」などと難ずるが既に論に落ち、捏造ならんや。ねつぞういや、さような批判すらも。呵々。

蕎麦湯を啜り、そこはかとなき美味を賞する。胃にわろき論などというものを思うなかれ。

完